



2025 年

2 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 2 月 1 6 日 ヨハネ福音書 3 : 2 2 - 3 0 .

『シメオンとヨハネ』

・ 2 月 2 3 日 ルカ福音書 4 : 1 6 - 2 4 .

『受くる家あらず』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

あの方（イエス）は必ず栄え、私は衰える、と言ったのは、まだ投獄される前の洗礼者ヨハネでした（３：３０）。彼が投獄される理由は、分割領主のヘロデ・アンティパスが法を犯し、自分の兄弟の妻と強引に結婚したことを、容赦なく非難したからです。彼の刑死はイエスのそれよりも２～３年早かったと思われます。彼は自分の死を、覚悟していたようです。

さて、その死の３０年ほど前のこと、こちらは救い主イエスの誕生をもって、自分の死を覚悟した人物がいました。彼の名はシメオン。

主よ、今こそあなたはお言葉通り、この僕を安らかに去らせてください。私はこの目であなたの救いを見たからです。

（ルカ福音書２：２９－３０）

こちらは洗礼者のヨハネとは違い、自己否定的ではありません。むしろ彼の人生の最期を喜びをもって迎えられることが読者に伝わってきます。

この人は正しい人で、信仰が篤く、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。また、主が遣わすメシアを見るまでは死ぬことはない、とのお告げを聖霊から受けていた。

（ルカ福音書２：２５b-２６）

とあります。その半生をおもんばかりに、シメオンは既に高齢者の域に達していたと考えられます。彼が他界した３０年ほど後に、世代は交代し、洗礼者ヨハネの刑死がありました。世代を超えた悲喜交々とはいえ、両者の死には、それでも一つの共通点があります。いずれの人生も、イエス・キリストの十字架と復活を見ずして最期を迎えていたことです。彼らの人生は、イエスの“死と復活”に与る人々とは異なり、死んで一度、陰府に下ったイエスに委ねられるしかなかったのかもしれませんが。その後、何がどうなったのかを知る術はありません。

さて、ヨハネの死と前後して、世に出たのがナザレのイエスでしたが、

世の人々はイエスのことを、ヨハネの生まれ変わりであると誤解します。両者にはたしかに共通点がありました。それは彼らの存在を通して歴史が動いているという点です。同時に彼らが似て非なる存在であることが、かえって、世に下ったメシアとは、そもそもどういう方だったのかという疑問を解く鍵ともなり得たのです。

一世代前に召された預言者シメオンの方はというと、彼は、自身の恵まれた最期を迎えるにあたって言葉を遺しています。「主よ、…救いを見たからです」に続き、今度は赤子イエスの母親のマリアに向かって、

御覧なさい、この子（イエス）は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなた（マリア）の魂さえも刺し貫くでしょう。多くの人々の心の思いが現れるためです。

（ルカ福音書 2：34b-35）

死の直前に獄中からイエスの許に弟子を派遣して、イエスが“来るべき方（メシア？）”なのかどうかを確認したかった後代のヨハネ（ルカ福音書 7：19）とは異なり、預言者シメオンの方はイエスの未来に関して、正確な予見をもっていたことが分かります。

このように、イエスの生涯を知っていた預言者シメオンと、自分が来たるべき方の先駆者であるかもしれぬこと以外には認識の無かった洗礼者ヨハネとの差は非常に大きかったという事実を、聖書は伝えていたのです。

《 受くる家あらず 》

洗礼者ヨハネの最後の大仕事は、ヨルダン川でナザレのイエスに洗礼を授けることでした。イエスが彼から洗礼を受けて祈っておられると、

天が開け、聖霊が鳩のような姿でイエスの上に降ってきた。すると、「あなたは私の愛する子、私の心に適う者」という声が天から聞こえた。（ルカ福音書 3：22）

ルカ福音書によると、前後して当のヨハネ自身が、分割領主のヘロデ・アンティパスに捕らえられたことが報告されています。

その後、イエスは荒れ野で悪魔からの試みを受け、これを退け、故郷のガリラヤに帰還します。するとなぜか、

イエスが霊の力に満ちてガリラヤに帰られると、その噂が周り一帯に広まった。（ルカ福音書 4：14）

というのです。その勢いでイエスはガリラヤの諸会堂で教えを説くことになり、その教えに聴衆は圧倒されます。

主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人に開放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、打ちひしがれている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。

（ルカ福音書 4：18 - 19）

イエスが故郷で教えを説くことになる様子は、預言者イザヤが、その昔、既に予言していたこと（イザヤ書 61 章他）が、今、その通りに実現したのだと、イエスは説きます。「主の霊が私に臨んだ」ことは、イエスがヨハネから洗礼を授かった時に、確かに実現していたことでした。その目撃者が広範囲に広がっていたのかもしれませんが。

けれども、同じ生まれ故郷のガリラヤでも、イエス自身の実家に戻ると、勝手が違うようです。イエスが近所の会堂で教えを説こうとすると、「この人は、ヨセフの息子ではないのか」との声が上がります。

イエスのこの世の父親のヨセフは、この時までには他界していた（？）ようですが、彼は大工で、近隣の家々の建築や修理を手掛けていた顔見知りでした。この世の論理としては、よりによって“その息子”の教えを聞かされることになろうとは…。人々は違和感を覚え、イエスは拒絶される運命にありました（預言者、故郷に容れられず）。

それが、神の子でありメシアであるとする、なおさらのことだったのかもしれませんが。